

「かしこい小僧さん」

昔、一休さんいっしきゅうさんという、とんちで評判の小僧さんがいました。ある日のこと、評判をききつけた殿様が、お城に一休さんを招きました。

「知恵ものであると評判のそなたに、ひとつ頼みがある。実は、そこにある屏風びよぶすの虎が夜な夜な屏風を抜け出して、悪さをして困っておる。どうじゃ、なんとかしてその虎をしばりあげてはくれぬか」

一休さんは答えました。

「なるほど、すごい虎ですね。それはお困りでしょう。わかりました。おまかせください」

一休さんは、はちまきをして腕をまくり、家来が持ってきた縄をうけると、屏風の前でむんつとかまえ、虎をにらみつけました。

「お殿様、用意はできました。さあ、虎を屏風から追い出してください。すぐにしばってごらんにいれます」

それを聞いた殿様は、思わずいいました。

「何を申すか。絵の虎を追い出せるわけがないではないか」

一休さんはにっこりと笑って、

「そうですか。それは残念です。出てこない虎をしばることにはできませんから」

そういうと、その場で居住まいを直し、深々と礼をしました。それを見た殿様は、声をあげて笑いました。

「なるほど、あっぱれな小僧じゃ。ほうびをつかわす」

こうして一休さんは、たくさんたくさんのほうびをもらってお寺に帰りました。

